FROM United Kingdom

中野香織

㊹不運で幸せなフランス的愛

お勧めいただいた「モナリザ・スマイル」を観てきました。いやあ、最初のほうのシーンはひとごとと思えなかった。おそろしく知識だけはある生徒たちに初授業でうちのめされ、じゃあやってやろうじゃんかとばかり次回からはシラバス無視でいく気負いすぎ教師ってもう、遠い遠い日のわたくし…。ハズカシ。それもあってか「教師もの」ってどうも居心地悪くて、冷静な目で見られません。この映画はもう、この秋冬のトレンドの「50年代レディ・シック」の動くカタログとして堪能いたしました。

ウエディングドレスをしずしずとまとってうそっぽい50年代風「スマイル」をきめるキルスティン・ダンスト、笑えるなあと思っていたら、次の日に観た「スパイダーマン2」ではウエディングドレスを着て走ってました。なんだかな。

それはそうと、「フランスでは感動学園ものというジャンルが存在しえない」という敦子さんのご指摘になるほどと思ったんですが、フランスにしか存在しえないジャンルというのもありません？　ブノワ・ジャコの「イザベル・アジャーニの惑い」とフランス映画祭横浜で上映していたティエリー・クリファの「あなたを待つ人生」を観て感じたことですが、つまり「切れる・切れないのずるずる(不倫)愛もの」というジャンル。切れたいはずなのにやっぱりずるずると引き戻され…という先のない泥沼ずぶずぶ状況そのものを娯楽映画にしちゃう（そういう映画を受け入れる観客も存在する）という例は、イギリスやアメリカには思い当たらない気がする（あったら教えてください）。日本の「失楽園」の二人にしても「切れたい」なんてことはなくて、二人で一つになって死ぬという「幸福な」(単純な?)選択をするわけだし。フランスの愛人たちのような複雑さはない。

あ、そもそも、二人で一つになって死ぬというそのやり方にしても、フランス映画の恋人たちは格が上(というのか)ですよね。ヤン・サミュエルの「世界でいちばん不運で幸せな私」のギョーム・カネ(ラブ！)とマリオン・コティヤールのことですが。自分たちにしか通用しないルールのゲームにとらわれた幼なじみ、という設定がまた遠い遠い遠い日のわたくし(笑)を思いださせてあまり冷静に見られなかったところもあるとはいえ、「フランス映画っぽくない」破天荒で大人気ないラブストーリーの結末には、笑うやらあきれるやら涙するやら。制御不可能なあらゆる感情の奔流は「愛」そのもの？　なんちて。ともかくフランス映画における愛の描写の幅広さというか底力にあらためて圧倒されるこの頃です。

ドーバー越えて

往復連載

齋藤敦子
中野香織

「イザベル・アジャーニの惑い」
シネスイッチ銀座にて上映中

服飾史家である中野香織さんと、映画評論家で字幕翻訳家の齋藤敦子さんの往復書簡的コラム。ファッション誌の映画コラムニストとフランス映画社宣伝部員として出会った中野さんと齋藤さんは、以来十数年、友情を育む。この連載では、イギリス文化とフランス映画という専門分野をベースに映画談義が交わされる。

オブジェ制作＝井上陽子